

産官学と大学の研究



特別寄稿

遠山 正 彌*

本誌は夏号より工学部・薬学部に加えて医学部系の先生方にも配布される運びになると編集部よりお聞きしました。創業を目指しての医・歯・薬連携はもとより盛んですが医・工の連携はそれをしのぐ勢いです。事実手術へのロボティックスの導入、診断機器や治療機器の開発、再生医療での連携など例をあげていけばきりがありません。大阪大学医学部では未来医療センターにおける再生医療のいくつかのシーズが治験段階に到達しています。また医・工連携センターも大阪大学に設置され活動を開始しています。夏号の特集は医・工連携でもありその意味でも本誌を媒介とする情報が医学系にも流布されることはまさにタイムリーです。この期にあたり少し大学の研究について考えてみたいと思います。

いまや産官学の連携は大学のなかで重要な位置を占め、産官学といえば評価の最先端に位置し、もてはやされています。30年前にはまさに想像だにできませんでした。太平洋戦争を挟み日本人の評価は右から左へ極端な180度変化を常とする傾向がありますが産官学に対する評価変化も日本人得意の180度変化と重なって見えてしまいます。社会の流れと必要性が産官学の共同研究をその位置まで引き上げたのでしょうか、産官学の共同研究が大学の心臓部であると声高にいわれようと、根が素直でないせいもあり本当にそうであろうかと一歩引いてしまいます。大学には起業家を目指す学生も当世のことですから相

当数入学するでしょう。しかしながら大半の学生はサイエンスを求めて大学に入学するのではないのでしょうか。言い換えれば「大学はサイエンスの場」というのが社会認識です。さらに極言しますと「サイエンスの場であるとの評価を失った大学は大学として存在し得ない」のです。大学の大きな使命の一つは学生に自然や生命の不思議を認識させ、論理性と非論理性より成るサイエンスの面白さを味あわせることにあると思います。

確かに現在工学領域、情報領域はもとより医学系、生命科学系でも多くの有望なシーズがだされ、企業と提携して或いは自らベンチャーを立ち上げ商品化する試みがなされ、成功を収めているケースも多々あります。でもよく考えるとそこに到達するにはどのようなシーズでも長い雌伏の時があった筈です。何が言いたいかと申しますと基礎研究の積み重ねなくしては花が咲かないということです。実がなりますと多くの研究が一見無駄に終わっているようにも見えますし、そう判断しがちです。しかし果たして本当にそうでしょうか。それらの研究が決して無駄ではないことは我々の日常の実験を考えてみればよくわかります。我々は一つのポジティブデータを証明するためにはレフェリーに言われるまでもなくどれだけ多くのコントロール実験を積み重ねていることでしょう。いま日本の科学行政も企業もマスコミも果実をつむことだけに執心しているように思えてなりません。苗から育てる努力と忍耐がこれほど必要とされているときは今をおいてありません。手早く成長する杉をむやみに植えて里山をなくした行政の愚を繰り返してはなりません。大阪の経済は冷えているとよく言われます。その原因は目先の利益にこだわり本社を東京に移したりバブルで本業をおろそかにしたりするところにあると言いたい過ぎでしょうか。大学は実のなる苗を育てる場です。国も、企業もその観点で共同研究を推進してほしいと切に望みます。



*Masaya TOHYAMA
1947年4月生
大阪大学医学部卒、医学博士
現在、大阪大学大学院医学系研究科長、
医学部長、神経機能形態学講座教授、
神経化学
TEL 06-6879-3220
FAX 06-6879-3229
E-mail: mtohyama@anat2.med.
osaka-u.ac.jp